

特集
青森
～雪と共に生きる人の知恵～

Special Features
AOMORI
Snow country wisdom

文化

Culture

北の熱き民族音楽 津軽三味線

松木宏泰

MATSUKI Hiroyasu

NPO法人津軽三味線全国協議会相談役
NPO法人青森民謡協会顧問



1—発祥の地とその祖

津軽三味線はここ30年ほどの間に、日本はもとより世界にまで知られるようになった北の熱き民俗音楽である。

そもそも津軽三味線とは何か。一言でいえば、津軽民謡五大節(じょんから、よされ、小原、三下り、あいや)の曲調をもとにアレンジした即興の三味線音楽(曲弾き)ということになる。広い意味では、津軽民謡の伴奏音楽も含まれるが、最近では、即興の曲弾きが主流になってきた。



■写真1—文人太宰治の生家、斜陽館

津軽平野の一角、五所川原市金木。文人太宰治の生家、斜陽館があることで知られるこの町が発祥の地である。桜の名所芦野公園には、作家藤本義一の揮毫(文字や書画を書くこと)した碑が立っており、中心街には津軽三味線会館があって、ファンはその歴史に触れ、ライブ演奏を楽しむことができる。

その祖、仁太坊(秋元仁太郎)は、安政4(1857)年、金木の神原に生れた。8才のとき天然痘にかかって失明し、終生、面妖なあばた顔がトレードマークになった。伝えによると、坊は10才の頃、盲目の女芸人に三味線を習ったといわれる。『金木今昔物語』(白川兼五郎著)は、この女を瞽女(盲目の門付け女芸人。鼓・琵琶などを用いて語り物を語ったが、江戸時代以降、三味線の弾き語りをするようになった)であったとしているが、確かな証拠は残されていない。ただ、瞽女の持つ三弦の皮が主に犬皮であったことや撥に鉛を埋め込んだこと、口説き唄を得意としたことなど津軽三味線との共通点が多く、来訪して教えたか、あるいは、何らかの関わりがあったと思われる。



■写真2—弘前公園から望む岩木山



■写真3—芦野公園にある碑の除幕式(碑前演奏山田千里)



■写真4—津軽三味線会館



■写真5—三味線の制作過程(津軽三味線会館)



■写真6—白川軍八郎の像展示(津軽三味線会館)

津軽三味線がこの町に生れたのは何故だろう。金木は、元禄時代(1688～)、新田開発のため諸国からの移民と地元民と一緒に拓いた町で、このため競争心が旺盛で旧弊にこだわらない気風が生まれた。また、仁太坊の時代、交通の便は岩木川を行き交う川舟で、その舟着場が神原にあったので、十三湊を経由して、日本海の文化が津軽の中でもいち早く入ってきた。しかも、米どころで、旅芸人を温かく遇するゆとりと人情があったなどが背景として考えられる。

仁太坊は負けず嫌いで「おれは坊様(男の門付け芸人)だが人と違って門付け(一軒一軒の玄関先で芸を披露して金品を得ること)はしない。芸を売るのだ」という誇りを持っていた。明治21年、三味線を太棹に変え、一の糸を叩いて、聞く者をドッテン(驚かす)させる方法を編み出した。叩き三味線の原型で、一の太い糸を多用する弾き方である。町の盛り場で演じられる仁太坊の唸るような音色は評判を呼び、弟子入りを希望する坊様が相次いだ。

2—新しい奏法の模索

津軽三味線は、民謡の伴奏音楽が発原点であり、先駆者たちはどんな撥付けをしつらよいか模索した。

仁太坊の弟子で頭角を現したのは、明治8年、北津軽郡武田村長泥(現中泊町)に生れた長作坊(太田長作)である。なかなか頭のいい男だったといわれ、師の芸を吸収しながら新しく「長泥手」を生み出した。仁太坊と違うのは、三の糸を多用する音澄みを重視した奏法で、弾き三味線のもとになった。

明治の末期になると、三味線は坊様だけでなく、農民の間にも広まった。唄会が入場料を取って、掛け小屋興業として盛んに行なわれるようになり、民謡熱が高まったのである。同じ仁太坊の弟子で、唄に三味線に芸達者ぶりを発揮した嘉瀬の桃(黒川桃太郎)の登場もこの熱に拍車をかけた。

農民は坊様から三味線を習うとき、糸の音を声にした「口三味線」で教えられた。その農民の出で長作坊の弟

子、梅田豊月(鈴木豊五郎)がさらに奏法を進化させる。明治18年、五所川原梅田に生れた彼は、盲目の坊様ではなく晴眼者だった。145cm足らずの小男で身体に障害があり、手の指が極端に短かったので、太棹を握るとその指が糸に届かない。腐心したすえに手のひらを棹に乗せて、人差し指と小指で糸を押えた。その豊月が画期的な「梅田手」を考えつく。

三味線を弾くと分かるが、棹先に向かって胴皮の上の方に撥を当てると音色が弱(前撥)で、下の方は強(後撥)になる。長作坊の手は前撥の弱だけを使う弾き方だったが、梅田手は後撥の強も取り入れた。それだけではなく、撥を握る手の人差し指で弦をはじいたり、三味線のコマに小指をつけて音を鎮めたりした。こうした奏法は、邦楽三味線では邪道といわれたものだが、あえて踏み込んだことによって、強弱の撥付けと多彩な奏法による津軽三味線の特徴がつくられた。

この頃、のちに名人と称される白川軍八郎(明治42年生)、高橋竹山(同43年生)、木田林松栄(同44年生)、福士政勝(大正2年生)らが生れる。

3—津軽三味線の確立

津軽三味線を確立した白川軍八郎は、金木不動林の豪農の家に生れ、4才のとき麻疹が原因で目が不自由になった。両親は行く末を心配し、9才の年、仁太坊のもとへ弟子入りさせたが、音感が抜群で修業3年にして師匠を凌ぐ腕前になったといわれる。軍八郎はその後「長泥手」や「梅田手」をマスターして、16才のとき尾原家万次郎の一座から声が掛かり、プロの仲間入りをした。

大正から昭和にかけて、津軽は2年に一度の凶作が続いたが、北海道、樺太(現サハリン)はニシンやサケ・



■写真7—梅田豊月

■写真8—白川軍八郎



■写真9—高橋竹山

■写真10—木田林松栄

開くことになり、陸奥家演芸団時代、師と仰いだ軍八郎を遠く巡業先の利尻島から招いた。師はその日、胸の重い病を押して美智也と競演し、至芸の撥さばきで観客の心を揺さぶった。津軽三味線はようやく、東都でも陽の目を見たが、広く深く浸透するには、さらに二人の名人の登場が必要だった。

4—弾きの名人・叩きの名人

弾きの竹山、叩きの林松栄。二人の名人は好対照な存在としてクローズアップされた。

高橋竹山は、東津軽郡中平内村小湊（現平内町）に生れ、2才のとき麻疹が原因でなかば失明した。大正13年、14才になって、近くの藤沢に住む戸田坊（戸田重次郎）の住み込み弟子となり、生きてゆくために三味線と民謡を習った。戸田坊の三味は長作坊の流れを汲むとされる。竹山は入門してわずか2年で独立を許されたが、それは各地を門付けして歩く流浪の旅の始まりでもあった。

竹山に1年遅れ、木田林松栄（田中林次郎）は、南津軽郡柏木村（現平川市）の農家に生れた。晴眼者の彼は、三味線が好きでたまらず志した。19才のとき、仁太坊に連なる亀坊の弟子吹田三松栄に師事し、寝食を忘れて唄会三味線を学んだ。3年間の修業を終えると、腕前を見込まれて陸奥家演芸団から誘われ、念願のプロになった。

二人の名人は、その後いろいろ苦闘する。

竹山は、門付けで辛酸を舐めたあと、浪曲の曲師や鍼灸師などを経験するが、大正25年、津軽民謡の大御所成田雲竹と出会い、弟子入りすることにした。師と活動をともにしながら、つねに研究を怠らず、やわらかく澄んだ音色の弾き三味線を追い求めた。

一方の林松栄は、軍八郎の三味線にショックを覚えて、その秘手をものしよと同一座にもぐりこんだ。舞台でも楽屋でも、こっそり軍八郎に知られないように、撥さばきを盗んで真似をしてみたが、とてもきらめく音色は出てこない。軍八郎には敵わないと考えた林松栄は、苦心して叩き三味線に活路を見出した。

この二人の違いは、三味線に使う糸を比べるとよく分かる。津軽三味線の場合、一番太い糸は30匁（1匁は3.75グラム）が標準だが、竹山は25匁、林松栄はなんと40匁であった。糸は絹糸（いまはナイロンなどが主流）を太く撚り合わせたもので、林松栄はこの一糸を力強く叩いて前撥後撥をフルに使って豪快な音色を出した。逆に竹山は、細めの糸を使って、前撥の弱を活かしながら、ころころ転がすような優しい音色にこだわった。

最初に注目を浴びたのは林松栄の方で、昭和33年、

46才のとき上京、歌手浅利みきの奏者をつとめ、全身全霊で弾く強烈な音色が民謡人たちの度肝を抜いた。やがて、叩き三味線の名人と呼ばれるようになり、同41年にはカナダの万博で演奏し絶賛された。

竹山が陽の目を見たのは、雲竹が引退した、同39年54才のとき、労音の例会に出演したのが最初だった。とくに、渋谷のジャンジャン公演が同48年から始まり、その語りと総作曲「岩木」は、民謡に無縁の観客まで惹きつけた。叩きに対して弾き三味線の名人といわれるようになり、同61年、アメリカ公演ではニューヨーク・タイムズが激賞し、海外でもその実力が認められた。この二人が牽引車になり、津軽三味線は確たる評価が定まった。

5—津軽三味線と風土

金木を中心とした津軽平野は、春から秋までのどかなところだが、冬になると猛烈な地吹雪に見舞われる。津軽の農民は、マイクのない時代、荒れ狂う吹雪に向かってそれに負けないように声を出し、三弦を力いっぱい叩いて稽古をした。農閑期である雪の季節が芸能を育む大切な刻を与えてくれたのである。

生前、木田林松栄は「東京に出ると三味線は悪くなりますよ。やっぱり、津軽の寒み（さむみ）が必要なんだ」と話していた。凍てつく寒さが音色を豊かにするのだそうだ。竹山や軍八郎が津軽にこだわり続けたのもうなずける。

津軽三味線は、その風土が持つ歴史、文化、気質、気象などがさまざまに絡み合っている。哀感を帯びた音色は、貧しい時代をとぼとぼと歩いた坊様たちの心象を反映しており、その響きに名人たちが魂を吹き込んだ。

また、津軽の言葉との関連もある。例えば「津軽よされ節」の場合、三枚撥、つまり三拍子なのだが、弾いている

トリズムの合わないところが随所に出てくる。「変則三拍子」と言ってもいいくらいで、なれない奏者は頭を抱えてしまう。これは、津軽の言葉が「ねぶた〜ねんぶたコ」と傍点のように半間（半音）が多いためだと考えられている。

津軽の民謡や三味線を聴いていると、スタミナ比への趣もある。これでもか、これでもかと挑むのは津軽衆の気質から来ているようで「モツケー出たがり屋」「ジョッパリー負けず嫌い」「ノレソレー徹底する」といった言葉に象徴されている。こうして見ると、津軽三味線は強烈な芳香を放つ風土のエキスと思えなくもない。

6—北の熱き民俗音楽

津軽三味線の愛好者は年々増えている。

聞く人は心に沁み入る音色に陶醉し、弾く人は津軽の風土が醸す匂いと華麗な技法、ジャズに似た即興の感覚を愛してやまない。

竹山のあと、名手として活躍した山田千里は、津軽三味線大会を始めいろいろなイベントを創始して、その裾野をひろげた。いまや、奏者だけでも全国に5万人といわれ、都道府県でいないところはない。

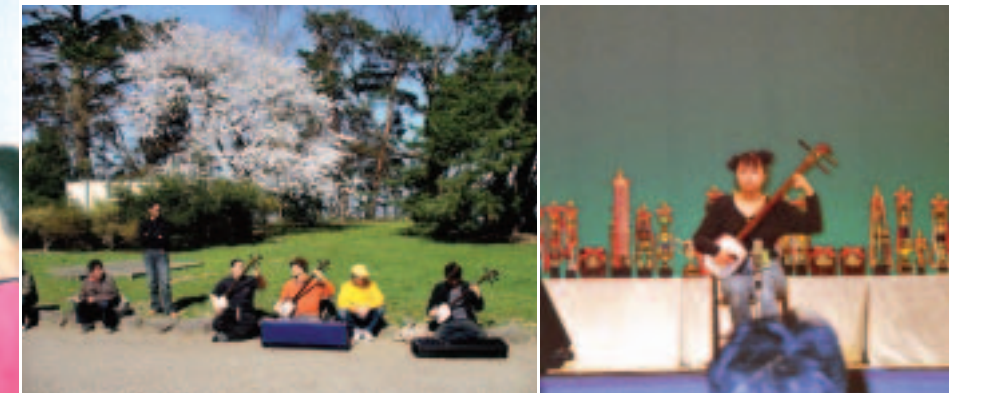
その弾き手たちが熱狂する津軽三味線の全国大会は、毎年5月のゴールデンウィークに、弘前市と五所川原市金木で開催されている。年々出場者が増えて、今年は両大会あわせて延べ800名を越えた。三味線を片手に全国からやってくるのは、老若男女さまざま、最近では子供と女性の出場者が目立って増えた。全国大会は、東京や大阪でも開かれているが、津軽詣でにこだわるのは本場の持つ威光というものだろうか。

中央で人気の吉田兄弟や上妻宏光、木乃下伸市らがこの大会から巣立ったことも熱を煽る一因のようだ。

舞台で一心不乱に弾く奏者たちと、それに声援を送るファンを見るにつけ、津軽三味線は、まさに、北の熱き民族音楽なのだと思感させられる。



■写真11—津軽三味線全国大会（金木町）



■写真12、13—津軽三味線全国大会（弘前市）